



2012年 1月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 39

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 31 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 会長が館長をしておられる萬翠荘が、二〇一一年一月二九日に国の重要文化財に指定されました。愛媛県指定有形文化財だった萬翠荘は、県の宝から国の宝になったという事ですね。本当におめでとうございます。

会長 > ありがとうございます。ルネッサンス様式の建築の素晴らしさ。百年前にこれだけの建築美を世に問うた久松定謨伯爵と建築家・木子七郎に敬意を表したいと思います。

高橋 > 萬翠荘のお話は、まだまだお聞きしたいと思いますが、残念ながらそれは又、別の機会に。本日も紅緑の「滑稽俳句集」のご解説よろしくお願い致します。今日は秋の動物の部、季語は「蟋蟀」です。きりぎりすは、こおろぎの古称ですね。

我見しよ薯蕷を喰居る蟋蟀 白雄

鳴かんかと髭かきあげてきりぎりす 大江丸

寝がへりをするぞ脇よれきりぎりす 一茶

きりぎりす三匹よれば喧嘩かな 一茶

銭箱の穴より出たりきりぎりす 一茶

一茶は、小さな虫にも優しい愛情を寄せています。

会長 > 「我見しよ薯蕷を・・・」、

直訳すれば、「薯を食べる蟋蟀を見てしまいましたよ」ということになりますが、当時は蟋蟀が薯を食べたのでしょうか。

「鳴かんかと髭かきあげて・・・」、

きりぎりすが鳴く直前に髭をふりあげているのです。「鳴かんかと」は「鳴こうとして」の意味ですね。

「寝がへりをするぞ・・・」、

一茶が野宿をしたのか、きりぎりすと寝ている。一茶は寝返りをするから脇へ寄れと、話しかけているのです。優しいですね。

「きりぎりす三匹よれば・・・」、

そんな「きりぎりす」も三匹寄れば争う。一匹のメスをめぐって二匹のオスが争ったのでしょうか。自然の世界の厳しさを描いていますが、一茶自身も遺産相続をめぐる紛争を抱えていましたから、余所ごとではなかったのかもしれませんが。

「錢箱の穴より出たり・・・」、

昔の家は建てつけも悪かったうえに戸締りもいい加減でしたから、さまざまな虫が入り込んでいたのでしょう。キリギリスが、錢箱から飛び出したという意外性に可笑し味がありますね。

高橋 > 次の季語は「秋の蚊」です。会長の蚊の句に、

一匹の蚊にストーカーされてゐる 健

という擬人化の蚊の滑稽句がありますね。季語は「蚊」ですから夏の句ですが、蚊は秋になると卵を産もうと、益々しつこいストーカーになりますね(笑)。滑稽俳句集の句に参ります。

秋の蚊や黙々として食ひ行く 召波

会長 > 「秋の蚊や黙々として…」、

秋の蚊は、活発ではない。「黙々として」は、蚊のようでもあり、作者のようでもある。一物仕立てか、取り合わせかということになるが、これは蚊のことで一物仕立ての句ですね。弱々しい蚊となっても、子孫を残す本能から、人の血を吸いにゆくのです。

高橋 > 有難うございます。何気ない句も解説して戴くと面白い句のような気持ちがして来るから不思議です。次の季語は「放屁虫」「虫」です。これで秋の動物の部は終わります。

放屁虫爺々が垣根としられけり 一茶

おれよりもはるか上手ぞ屁ひり虫 一茶

啼虫の中へさし込む馬の鼻 三千彦

会長 > 「放屁虫爺々が垣根と…」、

放屁癖のある爺さんをからかった句です。垣根越しに放屁をすることで知られた爺さん。品のない句ですが、これが俳句の原点なのですね。

「おれよりもはるか…」、

屁ひり虫の強烈な異臭に参った参ったということ。それを「俺より上手」と讃えたところが可笑いですね。

「啼虫の中へさし込む…」、

飼い葉桶の草に虫が混じっていたのでしょう。鳴く虫の中へ鼻をさし込み、鳴き声を愛でもせず、草を食うという句です。

高橋 > 品のない句が俳句の原点とは！「俳諧の連歌」のことですね。室町時代末期にそれまで貴族だけが詠んでいた「連歌」を、武士や庶民が俗な言葉で滑稽な内容を

詠んだのが「俳諧の連歌」。その最初の句、「発句」が独立して「俳句」になったと、以前教えて戴きましたね。これで「秋の動物の部」は終わりましたので、次の「秋の人事」の句に参ります。最初の季語は「攝待」「棚經」「走馬燈」「つと入」です。

一句ずつありますよ。続けてご解説下さいね。

攝待の施主や佛屋善右衛門 子規

棚經や夕顔の馬は耳もなし 也有

獨り淋し走馬燈に這入るべく 虚子

つと入やしる人に逢ふ拍子ぬけ 蕪村

会長 > 「攝待の施主や・・・」、

佛屋は屋号であり商売でもあるということですね。攝待するのは 儲けさせていた
だきます。という魂胆ですから。

「棚經や夕顔の馬は・・・」、

夕顔の実は洋梨のようなずんぐりしたかたちです。お盆に胡瓜や茄子で牛や馬を
つくりますが昔は夕顔を使ったのでしょう。夕顔はずんぐりしているから耳でもつ
けないと馬にはならない。

「獨り淋し走馬燈に・・・」、

走馬灯には臨死体験で見る人の一生が描かれます。虚子はその走馬灯の登場
人物になりたい。それほどに淋しいと言っています。走馬灯を見ていて瞬間的に
思っことを句にした。ということは「走馬灯」の「虚」の世界を描いてみせたので
す。

「つと入やしる人に・・・」、

「つと入」は新年の季語です。「苞入り」です。一月十日に「苞」に包んだ手土産を

持って神職の家を訪ねて宝物を拝観すると、いうものです。宝物に感歎していたら知人に出会い現実に引き戻されて損をしたような気分なんですね。正直な句にある可笑しさです。

高橋 > 成る程そういう事ですか。有難うございます。次の季語は「踊」と「花火」です。

重箱を見て崩れたる踊かな 也有

つつみ合し夫婦出くはす踊かな 儿董

人越しに踊見ありく足駄かな 五明

子はかくし親はかくれて踊かな 大江丸

禪宗も法華も出たる踊かな 紅縁

踊子の草臥て居る笑ひかな 紅縁

ながめせし間に八九本花火かな 大江丸

会長 > 「重箱を見て崩れ・・・」、

長丁場の盆踊りにはお腹が空きますから軽食をとる。重箱につめたご馳走が届く。早く食いたい人ばかりで 踊りの輪が崩れたという可笑しさ。もうこうなったら踊りどころじゃない。

「つつみ合し夫婦・・・」、

「つつみ合う」は布で顔を覆うなどして素性が露見しないようにすることです。それでもおおよそ、誰なのかぐらいはわかるのでしょう。

「人越しに踊見ありく・・・」、

下駄の齒の長いのはその分、身長がのびますから、大勢の見物人がいても後ろから見る事ができる。知患者ですね。

「子はかくし親は…」、

踊りは娯楽でもありましたが、うつつを抜かすと具合が悪いので、親も子もそれぞれに目立たぬようにということですね。

「禪宗も法華も出たる…」、

仏教の宗派を異にする人が、なにかを合同ですということはありますが、盆踊りだけは例外だということですね。

「踊子の草臥て居る…」、

踊り疲れて草臥れて顔を見合わせているのです。「草臥れましたね」「最後まで付き合いますか」「途中で抜けるのもどうかと」「仕方ないハハハ」などと小声で笑いあいながら踊っているのです。

「ながめせし間に八九本…」、

花火見物にきたのに「いい女」に見惚れていたのです。ながめせし間には、古歌の場合は長雨にかけてしますが、こちらは「眺める」にかけています。

高橋 > 古歌といいますと、「花の色はうつりにけないうらに我身世にふるながめせしまに」、小野小町の歌ですね。次の季語は「田番」と「鳴子」です。
会長も最近協会報で「鳴子の句」をお詠みですね。

その紐をゆるめるときに鳴り鳴子 健

人ありと見せる草履や田番小屋 一茶

寐はなしの足てをりをり鳴子かな 一茶

会長 > 「その紐をゆるめる…」、

引くときでなく緩めたときに鳴るという発見ですね。

「人ありと見せる草履…」、

夜番は田んぼや畑の作物を盗られないように寝ずの番をするもので、そのため
の小屋ですが、夜番をしなくても草履を入り口に揃えておけば、中に人がいるよう
に見えるわけですね。「田番小屋ダミーの草履と思はるる」というわけです。

「寐はなしの足で・・・」、

横着ですね。寝たままで鳴子を操作している。「足で紐ひつぱれば鳴る鳴子かな」
ということですが、寝ているところを描いたから可笑しいのですね。

高橋 > 成る程！句もご解説も面白いですね。もっともっとお聞きしたいのですが、残
念ながらお時間となってしまいました。最後に、本日の季語を用いての浪曲調の一
句、お願い出来たらと思います。

会長 > ♪蟋蟀やあああ 田番の小屋のなぐさめのおおおお
二匹を組ませて角力(相撲)とるううう
踊り出したるううう 勝った蟋蟀いいいいいい ♪